

三十年前のことです。会社の先輩に同行し、某企業に向かいました。朝一番の東京発の新幹線に乗り、初めて浜松の駅に降り立ちました。

「せっかく浜松に来たのだから、お昼はウナギでも奢るね。」

そんな先輩の有難いお申し出にも、甘えてはいけないという思いがよぎりました。薄給の身ながら、若くして結婚され、家庭のご事情で共働きが出来ないため、苦しく厳しい生活が彼一人の肩に掛かり、その節約ぶりは社内でも有名でした。社会人としてせめて割り勘。それにしてもウナギは…？ 懐事情を察し、＼立ち喰いそば＼を申し出たのです。

お昼に、私は特上のうな重をご馳走になりました。この日のために心掛けて、なけなしのお小遣いを貯めていたという先輩の心遣い。どこまでもお断りするこゝとに失礼を感じたのです。複雑な思いを抱えながら味わったあのような重の味。ご馳走様でした。